

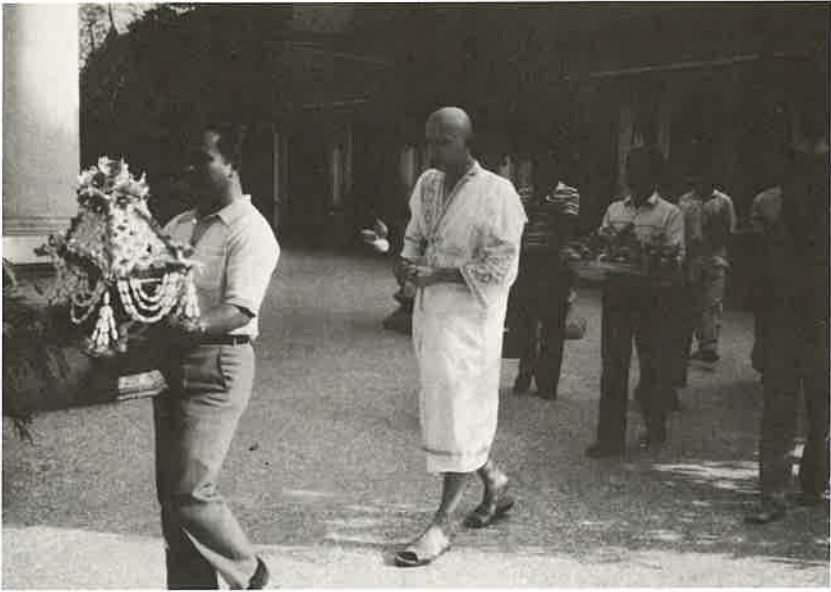
# 南方仏教の僧となるの記

前曹洞宗ボランティア会  
タイ国駐在員 成田泰夫

タイ・スリランカ・ラオス・ビルマ・カンボジアの東南アジア諸国では御存知のように二二七の戒律を厳しく守る上座部仏教国であります。そのタイ国でこの度得度を受けさせて頂く事は受け難き仏縁と思い感謝し、良く修行することを誓うものであります。

今回御縁をいただいたパクナム寺は、日本曹洞宗を始め大乘教団と密接なつながりを持ち、善光寺黒田武志方丈がその橋渡しに尽力されている事は誰もが周知のところであります。パクナム寺について語ることは新入り僧の役目ではありませんが、しかし、この寺には日本仏教徒との過去の長い歴史の匂いを感じさせるものがあります。私の如き新入りをタイのお寺が受け入

れてくれること自体、曾てこの寺に安居した多くの日本僧侶の実績がその礎となっているに違いありません。始めにタイの仏教というものが一般的にあまりにも知られていない為に少し説明の必要があるかと思えます。まず小乗仏教という名称は、小さな乗りものという意の、大乘の反対語としての、いわば劣称であり、南方仏教もしくは上座部仏教と呼ぶのが適当であるということ。もう一つは通過儀礼としての得度の習慣であります。男子二〇歳を過ぎる頃には自分の為以上に両親への徳行として一時出家を行ない、また僧院での生活を経験することにより、仏教というこの国の要<sup>かま</sup>となつてくる精神的な楔を自らに打ち込むことにも



なる訳です。但し、物質文明の急速な流入による社会変化で、大バンコク市に於て、得度経験者が五〇%を割ったとも言われていることは一つの大きな流れを象徴しています。

以上のような個有の文化を持つ国で日本人が得度を受けることは、同じ仏教国同志とは言え、全く異なった仏教体系に触れるという事にもなるわけです。しかし日本では、“小乗仏教”の名の通り、軽んじる風潮もあり、同じ仏教なら日本で学んだ方がよほど実になるというような極論もあります。私見ですが、同じ仏教と名乗る両国でありながら、異宗教であると言っても過言ではない程の違いがあり、だからこそお互いを知る努力が必要であろうと考えます。この点で外国人がタイで得度をする意味があるという論理に還るわけがあります。

さて私が経験した南方の得度式を簡単に御紹介したく存じます。すでに述べたようにこれまでパクナム寺において相当数の方が得度され、六年前には佐藤俊明

老師のお弟子であられる采川道昭師の手で日本語訳『得度式次第』も刊行されている為、その導入部においては十二分に整っています。

さて私の得度は成道会の前日の二月七日でした。

パクナム寺のある西バンコク・トンブリは未だに洪水の影響を受け、途中道路が運河と化している所もあり、そんな困難を越えて二十数名の日本人やタイ人が集まってくれました。式の日時は占術によって決める場合が多く、例えば朝の六時三分といったように、山手線の時刻表を連想するような数字が出てくるものですが、私の場合は四時ちようどでありました。得度式というのはいわば儀式の最後の段階であり、実はこの日までに得度式で唱えるパーリー語の唱文の暗記、式に立ち会う戒師・教授師・羯磨師、その他列座する二五名の僧伽の当日の供養のことなどをすべて整えてからであることは言うまでもありません。得度日が決まっていたからはきたりで、お世話になった方々などを廻り、自分が過去において造ってきた俗人としての懺悔をし、

貸借の清算もし、清浄な身になってから得度を迎えるのです。その他もろの慣例については略します。

さて剃髪を済ませ白衣に身を包み、得度の儀まで静かに待つことしばらく。ここまできるといかに感応の鈍い私にも、まもなく迎える二二七の具足戒受持の重さをかみしめる思いでありました。しかしタイ国における一時出家は、親類縁者への功德の意味あいが強く、哲学的というより現世的で、その点開式を待つ日本人の私はむしろ個人の内側における思索をつのらせ、高ぶらせていたのが正直なところでした。その意味で自分を大乘的人間であると感ぜざるを得ません。しかし、一人一人の思いはどうか、志をもつものに仏門を開き、あたかも観自在菩薩の掌中に居るかの如き安らぎを与えてくれる、大小乗を問わない仏教というものの大きさを同時に知った思いでありました。

さて式が挙行される授戒堂に入堂する前に、縁者ともどもお堂の周囲を右に三周した後、堂の正面にある浄域を示す結界標石の前で献香・献華・三拝を行ない、

この式の序奏が始まる。お堂に入っても戒師の前に赴くまでは堂内の本尊に於ける献香・献華・三拝、その後この式の施者から三衣を受け取り、合掌した腕に戴いたまま戒師の前に進むという順を踏まねばならない。その後、現前の二八名の僧伽に対し二千五百年前の仏教教団に対してもそうしたようにパーリー語の唱文が続く。前述の采川師の労作があるので、日本語でその内容を知る事が出来る。つまりは現前の尊師らに得度志願者の一切の罪過の許しを乞い、一切の苦からの解脱の為に出家を乞い、そして認められて初めて黄衣の着用を許される。黄衣着用後、式は三帰戒・十戒という僧侶としての基本的を守るべき戒律の授持に移る。その後、現前比丘の会議によって僧伽入団の賛否が問われる。パーリー語によって朗朗と歌われるように唱えられ、全ての賛成があつて始めて二二七の戒律を授かり僧伽集団への仲間入りとなる。

一 時間を越える式を終えてみると、そこには黄衣をまとった自分があり、それは全く別人のごとく。 一

時間前の自分がさかんに問いかける「おいどうしたんだ」やけに静かじゃないか、何か変だぞ」と。慣習で得度したての新僧をその僧坊へ訪ねて勞らう、というか次々に訪れてきては三拝をしてゆく。頭を床に深くつけて三拝をするタイの人達の顔には、一つの儀式を終えた満足感が見えると同時に、今、目の前にしている私という個人ではなく黄衣に対する真険で敬虔なものが見える。それは宗教が各個人の意志でする無理なものではなく嘗々と流れる精神の奥底のようなものを感じた。その後も毎日のように経験する南方仏教のしきたりの一つ一つに、意志の底に流れる何かというものについて意識せざるを得ない。それは大小乗の違いいかんでなく、仏教の底もしくは宗教の底流を流れるものであると信じたいし、パクナム寺在寺中も諸々の学習と共に確かめてみたいことである。